

## 【研修報告】

# ヒューマン・ケアリング理論を基盤にした 看護実践者・教育者・研究者への生涯教育

— 米国コロラド大学ヘルスサイエンスセンター看護学部主催の研修を通して —

戸村道子\*, 稲岡文昭\*

## はじめに

わが国においては少子高齢化、疾病構造の変化、医学の高度専門分化等に伴い、21世紀社会は「ケアの時代」と言われている。看護学分野の中でジョン・ワトソンは、1980年代前後からその重要性和価値について力説してきた。そして、キュアとケアの関係について、サリー・ガドウの主張；「通常では、キュアが基準であり最優先目標であり、ケアはその目標の手段にすぎない。しかしこの関係から逆転した枠組みが必要である。すなわちケアを倫理的理念ないし基準とし、それに従って限りのない治療や介入の限界が判断される。キュアはその手段にすぎない」という見地に賛同し、ヒューマン・ケアリング理論を発展させてきた（ワトソン、1989）。そして今日まで、コロラド大学ヘルスサイエンスセンター看護学部で、米国国内のみならず国際的に連携を取りながら理論の開発と実践への応用、研究を行っている。文献に目を通して、多くの看護実践者・教育者・研究者が、ヒューマン・ケアリングの重要性を指摘している。実際に日本でも、4年制大学における看護基礎教育の中で、ヒューマン・ケアリングの理論や概念が教授されている。さらにヒューマン・ケアリング理論を教育理念にすえ教育カリキュラムを構築している日本赤十字広島看護大学の例もみられる。しかし、ケアリングを生涯教育として教授するプログラムは、文献を見る限り米国においても、ほとんど皆無といってよい。

著者らは、2004年5月下旬の1週間、ヒューマン・ケアリング理論に基づく看護学士課程の教育プログラム開発のための調査として、またワトソン博士や看護哲学者として知られるガドウ博士との意見交換を兼ねて、彼らが担当するコロラド大学ヘルスサイエンスセンター看護学部主催の生涯教育研修プログラムに参加する機会を得た。本稿では、ヒューマン・ケアリングに関する国際的な生涯教育プログラムが、どのように系統的に生まれ、運営されてい

るのか、その内容も含めて紹介したい。

## 「ケアリングと癒しの国際認定 プログラム」の経緯と内容

ワトソン博士がコロラド大学ヘルスサイエンスセンターで看護学部長をしていた1986年、ヒューマン・ケアリングセンターを設立し、センター長を兼任する。このヒューマン・ケアリングセンターは、「ヒューマン・ケアリングと癒しの理論」を臨床実践へ応用する目的で設立されたものであり、具体的には以下の目標が掲げられている。

1. 看護教育・研究の領域にアートと人文学の知識を統合し、新しい科学モデルを構築する。
2. ヘルスケアシステムや健康に関する政策を変革するための新たなヒューマン・ケアリングと癒しのモデルを開発、評価、普及する。
3. 看護学だけでなく、他職種からなる国際的な実践者・教育者・研究者のためのフォーラムを開催する。
4. ヒューマン・ケアリングと癒しに関する理論、教育、研究、臨床実践モデルについて、情報提供やコンサルテーションを行う。

著者らが、今回参加した「ケアリングと癒しの国際認定プログラム」は、上記の目標を具体化する方策の一環として創られたものである。しかしながら、当時センター長であったワトソン博士自身に起った一連の悲劇的な事故と治療により、その要職を引かざるを得なかったことや、大学の管理運営者の交代等によって、ヒューマン・ケアリングセンター事業が一時中断され活動が見直された経緯がある。そしてワトソン博士が1999年8月に復帰し、今回、著者らが参加した「ケアリングと癒しの国際認定プログラム」も2002年より開始されている。

「ケアリングと癒しの国際認定プログラム」は、看護学部教授4名により6科目（クラス）8単位で構成され、毎年5月下旬から6月初旬と1月初旬か

\*日本赤十字広島看護大学

表1. コロラド大学ヘルスサイエンスセンター看護学部主催  
生涯継続教育：「ケアリングと癒しの国際認定プログラム」

International Certificate Program Caring and Healing

Courses	Credit	Faculty	Duration
Foundations of Healing Practice	1	Dr. Jannet Quinn	2 days
Theories & Philosophy of Caring and Healing	2	Dr. Jean Watson	3 days
Aesthetics and Wisdom Traditions	1	Dr. Jean Watson	2 days
Caring Inquiry: Narrative as Exemplar	2	Dr. Jura Sakalys	3 days
Ethics of Caring	1	Dr. Sally Gadow	2 days
Health Care as Spiritual Practice	1	Dr. Jannet Quinn	2 days

参加資格は、看護学士号有するものを対象とし、米国以外からの参加者については、コロラド大学院修士課程の入学資格に準じる

ら中旬の2度にわたり行われている（プログラムの構成は表1参照）。このプログラムは、海外の看護師をも対象に「ヒューマン・ケアリング」に関する生涯教育として公式にコロラド大学ヘルスサイエンスセンター看護学部から認定されている。ここで認定された単位は、米国では各州によって多少の相違があるものの、看護師免許更新時に必要な継続教育の単位として認められている。

このため、このプログラムは臨床の看護実践者、看護教育者、看護研究者を対象に修士課程以上の内容を想定し組まれている。開催場所は、コロラド大学ヘルスサイエンスセンターのあるコロラド州の州都デンバー市から車で30分ほど離れた、ロッキー山脈の麓にあるボルダー市のチャタクア州立公園の敷地にある静かな山荘で行われた。このボルダー市は、落ち着いた雰囲気のある小さな学園都市で、マラソンランナーの高橋尚子氏らが高地トレーニングを行う場所としても良く知られている。標高が1800～1900mの山岳地でもあるため、酸素は薄く、日差しも強く気温差も激しい。しかし、初夏にはグリーンの芝生や木々の緑に囲まれ、小鳥のさえずりを聞きながら、冬季には積雪に囲まれ暖炉を囲みながら、まさに、「ヒューマン・ケアリング」研修にふさわしい場所であった。

### 著者らが参加した研修プログラム

著者らが参加したのは、日程の都合上5日間と限られていたため用意されていた6科目中からガドウ博士の「ケアリングの倫理学（1単位）」とワトソン博士の「ケアリングと癒しの理論と哲学（2単位）」であった。米国のコロラド州をはじめ、ニュージャージー州、アリゾナ州、ニューメキシコ州、カリフォルニア州等また、海外からはオーストラリア、日本などから「ケアリング」を探求している看護実践

者・教育者・研究者が参加した。数週間滞在し集中的にすべてのプログラムを修了する者もいたが、大半の参加者は仕事上の理由で1～2年かけて、数度にわたりボルダー市を訪れプログラムを修了することであった。

今回の参加者は、看護基礎教育のなかでどのようにケアリング理論やケアリング倫理を教えていくのか模索している看護教員、自然科学・医学志向の臨床現場でどのように「ケアリング」を大切に実践していくのか苦悩している看護実践者や看護管理者であった。また、ヘルスケアシステムの変革に向けてケアリング理論をもとに研究に取り組んでいる研究者らもいた。これらの2クラスとも参加人数は10名から15名で、ほとんどすべての参加者が看護学修士号・博士号を持っており、年齢も20歳代から60歳代と多様であった。このように参加者の背景や動機は多様であり、参加者それぞれの知識・経験をもとにディスカッションを通して、さらに「ケアリング」の理解を深めていくことで、生涯教育プログラムとして機能していた。

#### 1. ガドウ博士による「ケアリングの倫理」

ガドウ博士は、世界の看護界においては彼女の教育・研究活動について華々しく紹介されていないが、米国において哲学博士の称号を得た最初の看護師である。哲学者のなかで早くから注目され、特にヘルスケア領域における哲学の第一人者と認識されている。彼女のケアリングについての哲学や倫理についての考えは、看護哲学者やケアリング理論家のみでなく、他の学問分野の論文にも引用されている。

文献からしか知らない著書らは、気難しい哲学者というイメージをもっていたが、細身の長身を少し折り曲げ物静かに歩く姿勢は鶴を思わせ、その微笑は弥勒菩薩そのものという印象を受けた。初対面の人にさえも“ほっと”させる雰囲気を漂わせ、ブルーの瞳には深々と叡智が秘められているようであった。クラスは、あらかじめ送付されている文献をもとにセミナー形式ですすめられた。どのようなコメントにも笑顔でうなずかれ、ときおり自分の考えを静かに語られ、そしてそれに対して参加者というより同僚から気安く話を伺うという謙虚な姿勢であった。

ガドウ博士の主要な考えは、ポストモダン時代を向かえ看護学を自然科学や医学から捉えるものではなく、また生物的・心理的・社会的・霊的に統合した学問として捉えるのではなく、哲学から看護学を再構築するという点である。彼女は、看護学の基盤となる哲学ないし理想とする看護学は、Paternalism

でもなければConsumerismでもなく、Existential Advocacyと主張している。Existential Advocacyとは、患者擁護・患者の代弁者・患者の権利擁護という意味でのAdvocacyではなく、Consumer Protectionでもない。それは、人間の最も基本で最も価値ある権利、自己決定の自由の原則にあるとしている。つまり看護師は、例えば患者の健康が損なわれる可能性があったとしても、個々の患者にとって真の意味で自由に自己決定ができるよう援助するということである。これを道徳的に遵守していくことがケアリング倫理としている。このExistential Advocacyの実践には、看護師としての「personal」versus「professional」な存在が関与し、加えて患者の「lived body」versus「object body」が複雑微妙に関与し、それぞれについて哲学的に解説をしている。

ガドウ博士のクラスは2日間、午前9時から午後4時までのゼミであったが、その難解さに心身とも疲労困憊した。しかし何回も参加したいと思わせる知的魅力にあふれ、そして久しぶりに充実感を味わったクラスであった。以下に興味・関心のある方のために、必読文献を列挙しておく。哲学者の論文だけに英語に熟知している者にとっても難解な文章である。これは彼女のゼミに参加した米国の修士・博士号をもつ看護師が本音で語っていたので間違いはない。何回も熟読することによって、何が語られ論議されているのか自ずと理解できる洞察が得られる文献である。

- ・ Gadow, S. (2003). Restorative nursing: Toward a philosophy of postmodern punishment. *Nursing Philosophy*, 4(2), 161-167.
- ・ Gadow, S. (2000). Philosophy as falling: Aiming for grace. *Nursing Philosophy*, 1(2), 1-9.
- ・ Gadow, S. (1996). Aging as death rehearsal: The oppressiveness of reason. *Journal of Clinical Ethics*, 7(1), 35-40.
- ・ Gadow, S. (1995). Ethical narratives in practice. *Nursing Science Quarterly*, 9(1), 8-9.
- ・ Gadow, S. (1995). Response to the contrary ideals of individualism and nursing value of care. *Scholarly Inquiry for Nursing Practice*, 9(3), 241-244.
- ・ Gadow, S. (1990). Existential advocacy: Philosophical foundations of nursing. In Pence, T. & Cantrall, J. (Eds.), *Ethics in nursing: An anthology*. New York, NLN.

## 2. ワトソン博士による「ケアリングと癒しの理論と哲学」

次に3日間にわたるこのクラスでも、著者らが当初イメージしていた大学でのディスカッション、例えば対立する意見を出し合い批判的に論議しながら理解を深めていくといった、時には競争的な雰囲気になるクラスとは全く次元の異なるものであった。参加者は、ゆったりと座れるカウチや椅子で円くなり、グループの真ん中には地球の描かれたテーブルクロスが敷かれ、キャンドルにケアリングの炎がともされた。そして、ケアリングを象徴するものとして、個々が持ち寄った草花が生けられ、ハートの置物、カード、また聖書や知り合った友人の名刺等が置かれていた。クラスの始めと終わりにはオペラやリラックス音楽をバックに瞑想に耽る。過去の経験から、ディスカッションの黙っていると取り残される「恐れ」と「緊張」、*「身構えの姿勢」*は、クラスが始まるとすぐにスーッと消えていく感覚を覚えた。

クラスは、ケアリング理論の中心概念であるケアリングの「10のケア因子」(現在クリニカル・カリタスの過程として発展されている)、「看護師と患者との間の主観的-間主観的な関係」、「トランスパーソナルな関係」、そして「ケアリングの瞬間」について、ディスカッションを中心に進められた。

例えば、ケアリングの瞬間の概念について、個々の参加者が、10のケア因子から一つを選択する。そしてそのケア因子の意味すること、それが自らのこれまでの体験や看護教育・臨床実践にどのように影響を及ぼしているかについて話し合った。例えば、看護師として個人的な家族との関係の中でのケアリングや、宗教観に基づいたケアリング、ケアの困難な精神疾患患者との関係が話し合われた。この中では、単に概念に対しての理解や知識を広げることにとどまらず、クラスの中で、ケアリングの体験と心と感情とを大切にしたい分ち合いがあった。そして、クラスの終了後、参加者はケアリング理論をそれぞれの臨床、教育、研究に関連させた課題について6ヶ月から1年後を目標に取り組み、課題を提出することになる。この課題については、著者らは一般的に人間関係が希薄になっているといわれる現代において、トランスパーソナルなケアの実践者を育成するために看護基礎教育の中での試みについて考えていきたいと思う。

ワトソン博士はケアリング理論の中で「看護の核心」として、ケアリング実践とトランスパーソナルな関係に不可欠な「10のケア因子」をさらに発展さ

せ、新たに「クリニカル・カリタスの過程」の枠組みで表現している (Watson, 2004)。ここに、10のケア因子から発展させたカリタスの過程について (矢印→以降に示す) 紹介する。カリタスとはギリシャ語で“大切なもの、そして特別な愛情のある関心を寄せること”を意味する。この新たな「カリタスの過程」では、霊的精神 (スピリチュアル) の次元が、強調され記述されている。

- ①「人間的主義・利他的価値観の形成」→「ケアリングの意識の状況にあって愛情-親切、平静を実践すること」
- ②「誠心誠意を持ったかかわりを通しての希望の注入」→「全身全霊をこめてそこに存在すること、そして自己とケアされる者の主観的世界と深い信念を支え可能にすること」
- ③「自己及び他者に対する鋭敏な感受性」→「スピリチュアルな実践とトランスパーソナルな自己を洗練しエゴを持った自己を超越すること」
- ④「援助-信頼、ヒューマンケアという関係の発展」→「援助-信頼の関係を発展させ支持し、真正のケアリングの関係を築くこと」
- ⑤「肯定的感情と否定的感情の表出の促進と受容」→「肯定的・否定的な感情を、自己とケアされる者との間の深い精神のつながりであるとして表出し、支持すること」
- ⑥「意思決定にあたっての科学的・系統的問題解決法の活用」→「ケアリングと癒しの実践のアートに従事し、創造的に自己を利用すること、またすべての知る方法は、ケアリングの過程であること」
- ⑦「対人的関係の中での教育-学習の促進」→「対人関係の中で正真の教育-学習に従事すること」
- ⑧「支持的・保護的・矯正の援助を包括した心的・物的・社会文化的・霊的環境の提供」→「癒しの環境をすべてのレベルにおいて創造すること (全体性、審美性、安楽、尊厳と平和が可能となる手段としての物理的・非物理的、そして微妙なエネルギーと意識についてのレベル)」
- ⑨「人間的ニーズの充足とその援助」→「意図的なケアリングの意識とともに基本的なニーズを援

助し、ヒューマンケアの本質を実施する。これらは、心・体・魂の調和を図り、全体性、すべてのケアの側面を可能にする。」

- ⑩「実在的-現象学的-精神的な力」→「自己とケアされる者への魂のケアについて、自身の生と死へ、またスピリチュアルで神秘的な実在主義的次元へと注意を寄せ切り開くこと」

## おわりに

「ケアリングと癒しの国際認定プログラム」に参加して、ワトソン博士やガドウ博士のケアリングの科学、哲学の真髄の思想に触れ、あらためてケアリングの概念の深淵さとケアリング意識を拡大し、コミットメントしていくことの重要性を実感した。この生涯教育プログラムに参加していた米国の臨床看護師は、日本の看護師以上に、病院の入院患者の重篤度、短期入院、さらに高度に複雑化する医療技術によって、ケアリング理論の臨床への適応に困難を感じていたのは確かである。しかし参加者の一人ひとりが、その現状に流されてしまうことなく疑問をもち、こうした教育プログラムに参加し、ケアリングのネットワークを拡大し、ケアリングの実践に向けてチャレンジしていた。

著者らも、今後得られた貴重なケアリングのネットワークを拡大し、ケアリングについて吟味し、教育実践に取り入れていけるよう研究を積み重ねながら模索していきたいと思う。

この「ケアリングと癒しの国際認定プログラム」に参加する貴重な機会のみでなく助成金を与えてくださった本大学に深く感謝いたします。

## 文 献

- Watson, J. (1988) / 稲岡文昭, 稲岡光子 (1992). ワトソン看護論 人間科学とヒューマンケア. 東京, 医学書院.
- Watson, J. (1989). ヒューマンケアリング理論の新次元. 日本看護科学学会誌, 9(2), 29-27.
- Watson, J. (1999). *Postmodern nursing and beyond*. Edinburgh, Scotland, UK, Churchill Livingstone.
- Watson, J. (2004). Theory of human caring. Retrieved May 17, 2004, from <http://www2.uchsc.edu/son/caring/content/wct.asp>